

## 月の花挽歌 ～12. 末摘花～

### 12- 2

伯母の家から山形東高等学校までの道程は800㍓くらいだったので、通学には申し分なかった。

防音処理されたバーと住居スペースは程よく区切られており、真紀が使用する洋風に改装された10㎡ほどのプライバシーが保たれてる部屋など、そのどの一つをとっても、再生された古民家は隅々にまで伯母らしさが息づいていた。

伯母の彩は姪っ子の真紀に対して、程好い距離間で接してくれた。

一人分作るのも二人分作るのも同じだからと朝食と夕食は彩が用意してくれたが、昼食は高校の中にある食堂の日替わり定食で済ませた。

真紀が高校や環境にも慣れて夏休みに入った紅花の盛りも終わりのある日、彩と昼食を『バー末摘花』の古材チークの一枚板でできたカウンターで取るようになった。

庭で折ってきた丸型で鮮紅色の柘榴の花が一枝シャト・ーラトゥール1952の空き瓶に無造作に生けてある。

ガラス器にトマトジュース仕立てのめんつゆを絡めたそーめんに焦がしたネギをトッピングして盛り付けた涼しげなランチを食べながら、彩と真紀はアブラゼミの声を聞いていた。

「(閑さや岩にしみ入る蟬の声)のセミ論争は知っているでしょう」と彩は唐突に尋ねた。

「斎藤茂吉のアブラゼミと東北大学小宮教授のニイニイゼミ、昭和の初めの話ですね」と真紀は臆せず正確に答えた。

「山形県生まれの茂吉としては、敗北宣言は辛かったでしょうね？」

「伯母さんは、紅花染めが好きなんですね」

真紀は話題を逸らすかのように言った。

一斉にセミの鳴声が止んだ気がした彩は、額に薄っすらと汗を浮かべて姪っ子の横顔をうかがいながら、「そうね。郷土愛も強いし……」とぞんざいに言いかけて、「紅花染めはデリケートで、汗や紫外線に弱いから、外出着には向いていないの。店の暖簾は仕方なしに化学染料を使用しているのよ。本来は鮮やかなピンク色で、艶やかさを秘めているのだけどね。近くに懇意にしている草木染工房があるから、今度、案内するわ」と伯母の立ち位置を意識して言った。

「よろしくお願ひします。ところで話は変わりますが、伯母さんは『源氏物語』の末摘花の巻をご存知ですか？」と真紀は空き瓶に生けられた柘榴の花を見ながら彩の心に揺さぶりをかけた。